

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

東京 大学

後期 日程

科目

総合科目 I

総括

試験時間	120 分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	100 点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

課題英文は2本とも内容が平易になった分だけ分量が増加している。それぞれの英文に対する設問は昨年と異なり同一で、各3問。設問(1)は和文で記す梗概を求め、設問(2)と設問(3)は英文で記す論文を求めている。論文試験に不要な英文和訳がなくなったことは当然として、英文で記す設問が4問というのは多いだろう。論文の語数指定も一考を要する。どの設問に対しても必要な内容を記すためには150~200語ほどになるが、今回指定された語数は100語までである。

〈特記事項・トピックス〉

英文は平易であるが、問題領域は1本目が「文化」、2本目が「法と倫理」である。そうであることが読み取れている論文がまず合否判定の対象になるであろう。なお第1問は論文を求めているが、第2問(3)は自由英作文に近い。

〈合格への学習対策〉

英文を書く訓練を絶えず続けることは言うまでもないが、それ以前に日本語で考える訓練が不可欠である。自分の思考力を限度まで使って考えようとするときに用いる言語は母語しかないからである。

問題(課題文・資料文)分析

問題番号	内容・テーマ	出典(著者)・資料	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
第1問	文化間で受け止め方の違いがある肩こり		筆者が文化の問題として考慮していない点があるので、この問題を論じるときの自分なりの座標を提示する必要がある。	易
第2問	戦争中に復讐で人を殺すことの是非		問題領域が法と倫理の領域にあり、殺人が心にどれほど大きい傷を残すかを考えさせる文章。	易

設問分析

問題番号 設問番号	形式	字数	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問のレベル
第1問 (1)	梗概の記述	140~160 字の和文	日本では当たり前と思われている肩こりがドイツやアメリカでそうではないという議論をまとめる。	易
(2)	論文	80~100 語の英文	「なぜ非常に多くの日本人が肩こりに悩むか」という筆者の疑問に対する考察。	標準
(3)	論文	80~100 語の英文	「なぜ身体的苦痛がある文化では当然視されるのに他の文化ではそうでないのか」という筆者の疑問に対する考察。	標準

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

問題番号 設問番号	形式	字数	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問の レベル
第2問 (1)	梗概	150～200 字の和文	主人公の戦時の内容をまとめる。	易
(2)	論文	80～100 語の英文	主人公が戦時に親族に怒ったことを話さなかった理由を説明。	標準
(3)	論文	80～100 語の英文	自分の親族を殺した犯人を射殺することをためらうヨーゼフを見て自分ならどのような行動をするか、あるいはどのような助言をするかを論述。	標準

「本文のレベル」と「設問のレベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。